上海・蘇州・無錫（3）

～京杭大運河～

恥ずかしい話だが、今回、蘇州を訪れるまで「京杭大運河」のことを何も知らなかった。

万里の長城と名を並べる古代四大工事の一つといわれる京杭大運河は隋王朝の時に作られた。隋は遣唐使でなじみ深い唐王朝の前の王朝だが、紀元五八一年から六一八年までのわずか二十七年で滅びた。

その原因の一つは皇帝が長江（揚子江）下流の江南地方に船で遊覧できるように大運河を造ったことにあるといわれる。

大工事のため六十八万人の死者が出た。余りに身勝手な大工事が命取りになった。

中国の大河は、黄河にしろ長江にしろ内陸から東シナ海に、つまり西から東に向かって流れている。

京杭大運河はこれらの大河を串刺しにするように、北京から杭州まで二千五百キロに渡って縦断している。

完工したのは六一〇年、地中海と紅海を結ぶスエズ運河より千二百年以上も前にスエズ運河の十倍の長さの大運河を造ったというのであるから驚きである。

皇帝という独裁者の強権があったからできたことであるが、ふと、世界第二の経済大国になりつつある今の中国のことを考えた。

皇帝ではないが、共産党の一党独裁という政治が、良し悪しは別として今の巨大な中国をつくりあげた。参議院選挙で右往左往している日本の将来はどうなるのかと心配になる。個人の自由がない独裁政治は困るが、リーダーシップ不在も困ったものである。

横路にそれたが、中国では古くから「上に極楽、下に蘇杭あり」といわれている。大運河によって造り出された、東洋のベニスとも称される水の都、蘇州・杭州の魅力を表現したものであろう。

夜、二十人乗りぐらいの舟で蘇州の運河を遊覧した。前記のことわざが白髪三千丈の表現とは思えないほど美しくも魅力的なものであった。

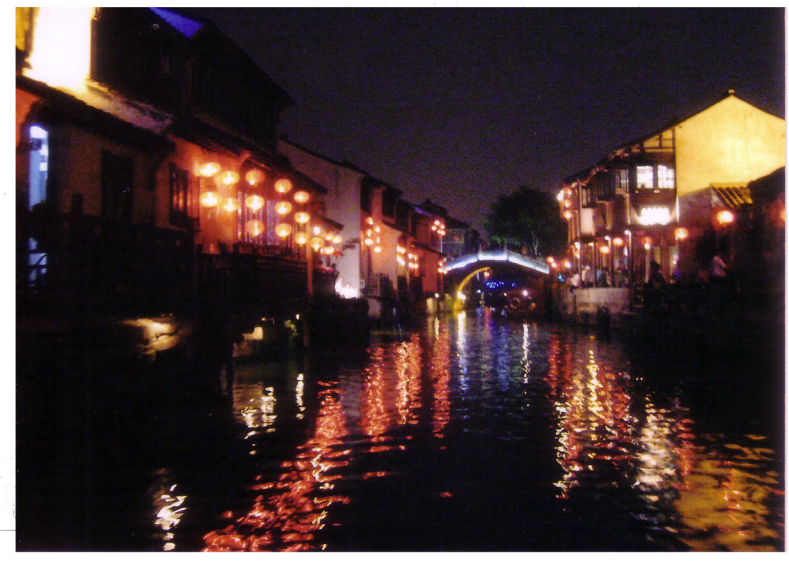
上りと下りの舟がすれ違うのが精一杯というような狭いところもある。船頭がさおで巧みに船を操る。目の前に映し出される両岸の庶民の生活、洗濯する人あり、釣りをする人あり、レストランあり。上海ナイトクルーズとは全く違った情緒あふれる四十分余の遊覧で蘇州の大ファンにさせられた。

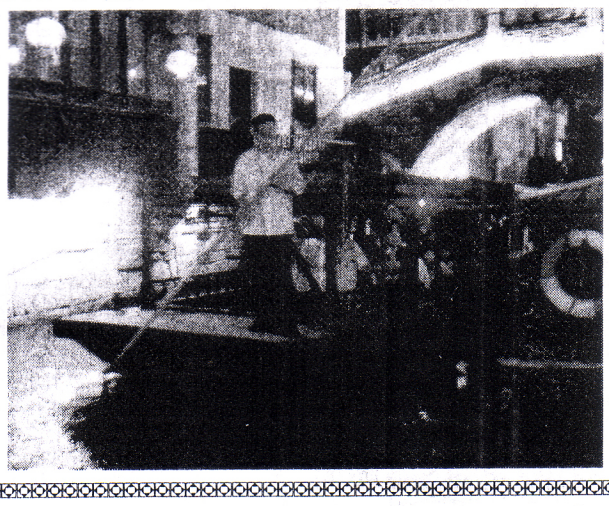
動機は何であったにせよ、後の世にこれだけのものを残した皇帝の存在を思い浮かべる。北と南を結ぶこの大運河は経済発展とともに広大な中国統一に大きな役割を果たした。

京杭大運河ツアーがなぜ企画されないのかと思った。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

昼の京杭大運河


夜の遊覧船での一風景


巧みに舟を操る船頭